

カトリック仙台司教区・ **カリタスジャパン** 東日本大震災救援・復興活動ニュースレター

発行人：平賀徹夫 編集：小松史朗
〒980-0014 仙台市青葉区本町1-2-12
カトリック仙台司教区事務局
Tel.022-222-7371 Fax022-222-7378
1) 義援金振替口座:02260-9-2305
名義:カトリック仙台司教区本部事務局
2) 支援金振替口座:00170-5-95979
名義:カリタスジャパン

東日本大震災から4年目を迎えた各カリタスベースでは、いろいろな追悼の行事が催されましたが、今回は、石巻ベースが行った被災地巡礼と、3月15日に行われた南三陸社会福祉協議会主催の「感謝の集い」をご紹介します。この「感謝の集い」では、米川ベース長の千葉道生さんが体験発表をいたしました。その体験もあわせてご紹介いたします。他ベースでの3.11の様子は次号をお楽しみに！

ともに歩く 3.11の石巻

仙台教区サポートセンター 濱山 麻子

3月11日、カリタス石巻ベースでは「ともに歩く 3.11の石巻」として、石巻市内を歩いて巡るイベントが行われました。ボランティア、地元の方、サポートセンタースタッフなど15名が参加し、ベース長のシスター細谷を先頭に、13時30分にベースを出発しました。

坂道を上り、まず到着したのは石巻市立門脇中学校です。こちらは震災直後から2011年の10月まで住民の方々の避難所となっていました。石巻ベースでは避難所で暮らしている住民の方々へ温かいお湯を提供する「お湯出し」を、避難所が閉鎖される日まで続けました。



上：門脇中学校
※お湯出しを行っていた場所

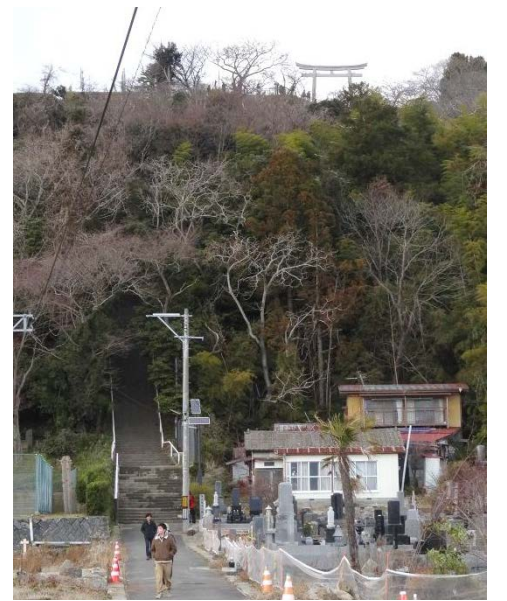
左：お湯出し
(2011年4月)

避難所で配布される食料はパンやおにぎりを中心でしたが、お湯があれば、温かい味噌汁やお茶、カップラーメンなどを作ることが出来ます。避難所入り口に設置したテントには、朝早くから大勢の住民の方々が並びました。また、テントの周りには子どもたちが集まり、ボランティアを相手に遊ぶ姿もありました。ここで暮らしていた方々とは今でもお茶っことなどで会う機会があり、「あの頃からの付き合いなんだよね。」と懐かしむことがあるそうです。「現在の活動の原点になっています。」というベース長の言葉が印象的でした。



続いて、初めのベースが開かれた石巻教会を経て、街を一望できる日和山公園に向かいました。公園の入り口付近には車が行列し、他団体のボランティアらしき若者や外国の方々、報道関係など、多くの人々が集まっていました。見下ろすと、この日の海は茶色く濁っており、冷たい風に時折雪が交じり、4年前の記憶と重なりました。

そして14時46分。防災無線のサイレンが響き渡りました。直前までざわざわと人の声が出ていた一帯から、サイレン以外の音がびたりと消えました。4年前のこの日起きたこと、この場所に避難してこられた方々が見ていた光景、その後全国から集まったボランティアがしてきたこと、家族を失い、家を失った方々の4年間の暮らし。様々なイメージが頭の中を駆け巡り、自然と涙が出ました。



黙祷の後、来た時とは違うルートで日和山を下りましたが、大変急な階段で、津波から逃れようとして駆け上がった方が大勢いたかと思うと、その時の恐怖を想像して足がすくむ思いでした。

その後は、津波の後の火事で焼けた門脇小学校や、ご遺族が祈りを捧げることができるように作られた「祈りの杜」、「がんばろう！石巻」の看板などを巡りました。門脇地区はほとんどが野原となり、嵩上げ工事や新しい道路の建設が行われています。道路脇の看板にはカエルのイラストと「この町にみんながカエってきますように」の文字がありました。ほとんど建物がなくなってしまったこの場所に、住民の方が帰ってくるにはどれだけの時間がかかるのでしょうか。土台だけが残された建物の跡地で、花やお菓子を供えて祈っている方々の姿を見ながら、あの方々はどこに帰って行くのだろうと考えました。

およそ2時間半、おそらく車で走れば見落としてしまいそうなものもじっくりと見る事ができました。テレビの画面を見ても、想像することはできます。しかし、実際の場所に立つことで、被害の大きさ、恐ろしさを感じ、思いを馳せることができるのだと強く感じました。



南三陸ボランティア感謝の集い

仙台教区サポートセンター 長谷川 昌子

東日本大震災で、壊滅的な被害を受けた南三陸町では、何とか支援活動のために各地から南三陸に来られるようになった時、大勢のボランティアさんたちが支援のために集まりました。

南三陸町は彼らへの対応のため、「災害ボランティアセンター」を立ち上げました。南三陸のボランティア活動が番組などに出るたびに映される、あの白い大きいテントです。

米川ベースのボランティア活動も、南三陸ベイサイドアリーナの駐車場に張られたこの白い大テントと密接な繋がりをもって始められました。

各地で行われた3.11の追悼儀式が終わった3月15日(日)。南三陸町では、「南三陸ボランティア感謝の集い」が、南三陸町アリーナで開催されました。



これは、「災害ボランティアセンター」の立っていたところが、盛り土されるため、急遽立ち退かなければならないことから、シンボルともなっていた白い大テントが畳まれ、新たに、「ボランティアセンター」としての歩み始めるために、これまでお世話になったすべてのボランティアの方たちへの感謝の集いをしたい、ということで企画されたものです。



アリーナの広い体育館に、1,300脚のイスが並べられていましたが、日本中から駆けつけた人々、現在ボランティア活動をしている人々などで、ほぼ満席。

大森創作太鼓による「旭ヶ浦」の演奏が勇壮に、オープニングの11時きっかりに始まりました。



まず、開会のあいさつは南三陸社会福祉協議会会長・阿部東夫さん。東日本大震災による、地震、津波で町の約6割の建物が被災し、社会福祉協議会の残った3人の職員で、この活動が始まり、近畿地方の社会福祉協議会の方々、ボランティアの方々も続々と来てくださり、皆さまのおかげで、町民は助けられ、励まされてきました。今、南三陸町は新しい町造りにかかっています。この復興には、コミュニティの再生の問題がかかっています。これからも、皆さんのお力が必要です。どうぞよろしくお願いいたします、と熱い気持ちのこもったあいさつ。



続いて、南三陸町社会福祉協議会事務局長・猪又隆弘さんが、ご自身で制作されたDVDの映像と音楽で「ボランティアセンターの軌跡」をわかりやすく説明してくださいました。

次に、感謝の辞を南三陸町長・佐藤仁さんが、私は震災後4年たっても、震災の映像を見たりすると涙がこぼれる、と話し始められました。最初、町民は、絶望と悲嘆の日々で、「希望」という言葉も出てこない、そのような状況の時に、たくさんのボランティアの方々が出てくださり、かれらのひたむきに活動をしてくださる姿に、町民はやっと「明日」という言葉が言えた、そんな町民に寄り添ってくださり、ひたすら、黙々と活動して下さった皆さまに感謝したいと思いました。高台移転で、前に向かって歩くボランティアセンターにしよう、と考えたとき、これまでボランティアに来てくださった14万人の方に何の謝意も表さずに終わらせていいのかということで、この日を迎えることができました。日本と世界各国からご支援をいただいたが、その縁を大切に、復興途上の南三陸町をこれからも支援していただきたい、と感謝を述べられました。

次は、ボランティア体験発表で、個人代表として、東京からボランティアを続けてこられた生田久也さんは、自分がボランティア活動中怪我もせず、4年間続けてこられたのは、局長自身が町のためにがんばり、体を張って守って来てくださったからだ、と南三陸町の方々の協力体制に触れ、この町が元気になるように盛り上げ、局長から「もう、来るな」と言われるまでボランティアを続けたい、と語り、大きな拍手を浴びていました。

2番目は、NPO法人「時薬堂(ときぐすりどう)」代表高橋由美さん。被災者、特に高齢者が生き抜く力を取り戻すために、歌や踊りで笑顔を届け、手話による手踊り、5本の指を使う指編み、笑いケア体操などを仮設住宅の人々に教えながらボランティア活動を続けておられます。

3番目は団体でボランティア活動を続けている代表として、カリタス米川ベースの千葉道生ベース長が話しました。

こうして、南三陸今村組による「陸仙海」というよさこいが舞台いっぱいになり広げられ、続いて、全員で感謝の歌として「花は咲く」を歌い、閉会のあいさつで終わりました。

その後、広場で、おにぎりや牡蠣汁、ちゃんこなどが振る舞われ、旧交をあたためながら、交流している姿が見られ、改めて、南三陸町が町をあげて、みんなでボランティアさんに感謝の心を表そうとしているのを感じました。



「南三陸町災害ボランティアセンター」から
「南三陸町ボランティアセンター」へ

カリタス米川ベース 千葉 道生

私はカリタス米川ベースの千葉と申します。

今日はこの感謝祭で、私の南三陸でのボランティア活動の体験や思い出を話してほしい、という依頼がありましたので、つたない話になるかと思いますが分かち合わせていただきます。



私はおよそ3年9か月、南三陸町に通い、活動をしてきました。初めて志津川高校の避難所へ物資の仕分けに行った時、段ボールで仕切られたところで寝ている大勢の年配の方たちを見て、少しでも早く元の生活に戻って欲しいと思いました。そこで、瓦礫の町を見たくないという多くの声を聞いたことから、災害ボランティアセンターで片づけ作業などのお手伝いをしてきました。

繰り返し繰り返し、毎日終わりのない作業に、疲労困憊することもありましたが、毎日入れ替わりで来るたくさんのボランティアさんたちと協力しながら、見違えるほどきれいに片付いていく姿を見て感動し、何とか持ちこたえながらこれまでやってきました。

また、ベースに帰ってから、皆でご飯を食べて、一日の振り返りをボランティアの仲間たちと分かち合い、気持ちを整理することができたこともこれまで続けてこられた大きな要因ではないかと思えます。

町の片づけが落ち着いてくると、漁業や農業、仮設住宅でのお茶っこサロンといったコミュニティ形成のサポートなど、地味に目立たないように自分のできることを模索してきました。ですが、結局はいつもお手伝いに行くつもりが逆にもてなされてしまい、実はお互いに支え合っていることに何度も気づかされました。

私がどのような思いで活動しているか？ というと、以前、南三陸の内陸の入谷小学校の校長先生に、「この町に来ているボランティアさんの思いを、子どもたちに伝えて欲しい、子どもたちはこれを知る必要がある！ これからこの町で育っていく子どもたちに、それを伝えることが大切だ！」と言われ、伺ったことがあります。校長先生の朝礼の代わりに、生徒たちに何を話すべきか考えました。

私は南三陸に来る前、少し海外でボランティアをしていたので、その時の体験を通し、南三陸から見える希望について話しました。海外で一緒に働いていた仲間たちは、「どうすれば世界が平和になるのか？」と真剣に考えていました。私は、「世界平和なんて不可能だよ」と最初から諦めていたのですが、彼らはまったく諦めていませんでした。

では「どうすれば世界が平和になるのか？」

まずは自分の周りにいる人を大切にすること。

人を迎え入れること。

信頼すること。

泥まみれになりながらの
用水路清掃作業
(2012年6月)



家族や、学校の友だち、職場の仲間、地元の仲間と、皆がそれぞれの場所でそれを続けていき、その積み重ねが、世界を平和にしていける可能性がある。それが簡単そうで難しいから、戦争が続いている。

でも震災後に来た南三陸町では、いつも笑顔でボランティア活動に参加している学生が、実は学費を自分で払いながら、ここにボランティアに来ていると聞いたことがあります。80歳を超えても、少しでも役に立ちたいという年配の方からのお申し込みもありました。小学生の女の子が、仮設住宅を回って、歌を歌いに来てくれました。私が瓦礫撤去の現場リーダーをしている時、とてもよく働く人がいたので、どんどん仕事をお願いしたら、とある銀行の頭取さんでした。

このように南三陸町は、たくさんのボランティアが来て、年齢も性別も立場も超えて、みんなが一致して復興のために頑張ってきている。そして、被災していながらも温かいもてなしで、訪れる人々を受け入れている漁師さんや地元の方たちがたくさんいる。この南三陸町には、世界を平和にするための希望を感じている、と子どもたちに伝えました。



あのWEPのテント「南三陸町災害ボランティアセンター」には、雨の日も、風の日も、雪の日も、真夏の炎天下の日も、南三陸町の町民と支援者を結ぶシンボルとして、大勢の人が集まってきました。

私はこの場所で多くの人と出会い、一緒に汗を流し、泥まみれになり、ずぶ濡れになり、たくさん笑い、涙を流し、時にはけんかもしたたくさんの思い出があります。

来年度からは、「災害」が取れ、「南三陸町ボランティアセンター」として、町民やボランティアの皆さんと、これからも共に歩いていくと聞いた時は、復興へ、そして南三陸の未来にとって、大きな力となると感じました。

新しく生まれ変わっていく南三陸町で、私もまだこれから皆さんと一緒に、たくさんの思い出を作っていきたいと思っています。

皆さん、今後ともどうぞよろしくお願ひいたします。



地域復興支援「モアイ」作り！
※「モアイ」は、イースター島のラパヌイ語で、「未来に生きる」という意味です。
木彫りモアイは、復興商店街などに設置されています。

